

ウクライナから避難 音楽家母子

爆撃 楽器も諦めた

戦禍の続くウクライナから東京に避難しているチェロ奏者のタチアナ・ラブロワさん(左)と娘のヤーナさん(右)が、九日に石川県能登町の柳田植物公園であったチャリティー演奏会に参加した。演奏会後のインタビューで、戦争が始まった後の体験や、日本にたどり着くまでの体験について語った。(上井啓太郎)

本紙に体験語る

タチアナさんは一九九六年から国立歌劇管弦楽団のチェロ奏者で、ヤーナさんもチェロ奏者として活動している。タチアナさんは首都キーウ(キエフ)、ヤーナさんはロシア国境に近い北部チェルニヒウに住んでいた。二人ともロシアが大々的に侵攻を始めた二月二十四日までは「全く戦争が起きると思っていなかった」といふ。

能登で演奏会「心温かく」

タチアナさんは二十四日、ややと攻撃を受けている早期、爆撃の音が聞こえることを理解したという。二人は一度ポーランドに避難し、ワルシャワの日本大使館のサポートを受け三月二十八日、成田空港に着いた。

「避難途中、ロシアの軍用機が空を通るたび、爆撃があるんじゃないかと恐怖を感じた」と振り返る。途中で列車も使うなどして数日後にリヒウにたどり着いた。



ウクライナから避難した経緯について振り返るタチアナ・ラブロワさんと娘のヤーナさん(左から)。石川県能登町上町で。



北陸中日新聞
2022年4月10日掲載記事



「演奏会では、友人と家族の五人で車に乗り、町を脱出した。地上戦は見なかったが、道は混み合い、普段なら五分で行ける道が五時間かかるような渋滞。」「避難途中、ロシアの軍用機が空を通るたび、爆撃があるんじゃないかと恐怖を感じた」と振り返る。途中で列車も使うなどして数日後にリヒウにたどり着いた。一方、タチアナさんは列

埋まった客席 涙ぬぐう人



ウクライナ支援コンサートで演奏するタチアナさんとヤーナさん(後者右から3人目)とヤーナさん(同2人目)

「突然の避難で楽器を運ぶことも諦めざるを得なかった。」「たまたま、九日の夕々の演奏会に使ったチェロは日本の友人と楽器店から借りた。」「ヤーナさんは「演奏できて本当にうれしい。お客さんの力で心が温かくなった」と話しつつ、チェルニヒウに残る親戚と連絡が取れないとして心配する。タチアナさんは「ウクライナは本当にひどい状況。日本人には、この戦争を止めるため、できることを何でもしてほしい」と訴えた。

柳田植物公園で九日に開かれたラブロワさん親子が出演する支援コンサートには、百三十人が来場。寄付は約二十九万円集まった。ラブロワさん親子に加え、スロバキア出身のチェロ奏者ルドビート・カントクさん、リトアニア人バイオリニストのシドレさん、金沢市在住のピアニスト山田ゆかりさんが出演。五人によるウクライナ国歌の演奏で始まり、カザルスの「鳥の歌」や最後のアンコールでの重唱「ふるさと」など、全十六曲を披露した。ほぼ満席の会場には、曲の合間に涙をぬぐう人も見られ、終了後には奏者たちに直接感謝を伝える人が絶えなかった。第二次大戦中、東京で空襲に遭ったという能登町恋路の山近孝子さん(左)は「自分も戦争の時代の人間。戦争なんて、なんてつまらないことをしているんだろう」という気持ちになったと話した。

十日午後一時からは富山県砺波市の砺波市文化会館でも支援コンサートが寄付は受け付けている。十三日午後七時から石川県立音楽堂での「風と緑の楽都音楽祭」プレイベントでも、タチアナさんが演奏を披露する予定。